

平成30年度第3 回北海道農業・農村振興審議会 議事概要

- 1 日時 平成30年12月17日（月）14:30～17:40
- 2 場所 T K P 札幌ビジネスセンター赤れんが前 はまなす
- 3 議題

（1）部会付託事項の調査審議状況について

- ・資料1-1、1-2に基づき、主要農作物種子生産部会での調査審議結果を報告。
- ・主要農作物種子生産部会の「適当である」との意見をもって、審議会での調査審議の結果とする旨を決定。
- ・主要農作物種子生産部会の廃止を決定。

（2）第5期北海道農業・農村振興推進計画の中間点検について

- ・資料2により説明

（3）意見交換

【委員からの主な意見等】

- ・飼料作物、酪農畜産全般についての要因分析や目標の評価については妥当であると思う。
- ・飼料作物については、植生改善が喫緊の課題。成功事例を示し技術普及を図る取組が必要。トウモロコシ子実、イアコーンサイレージなどの自給濃厚飼料の増産を一層進めるとともに、牧草を濃厚飼料の代わりに出来るような新しい技術開発が必要。
- ・酪農などにおいて高度化する省力化技術などに対応できる人材育成が必要。ベストパフォーマンスを引き出せる生産者が少ない。なぜできないのか分析が必要。
- ・酪農においては栄養管理と牛の生活環境改善が重要。コストと労力の兼ね合いがあるので、実証モデルを示していくのが良いのではないかと。
- ・肉用牛について、肥育素牛供給基地としてだけでなく、繁殖素牛の供給基地としてのブランド確立が必要ではないかと。また、ゲノミック評価を進め、勝早桜5の後継種雄牛の造成を急ぐ必要がある。豚・鶏は防疫対策を強化する必要。
- ・水田を中心に基盤整備をしている中で、米の面積が減少していることは残念な状況。米の需要は拡大に向けた努力が必要。北海道は食料供給基地として今後も展開していくと思うが、その中心に米があり、特Aという高い評価を得ているのだから、さらに効果があるものにしていただきたい。
- ・スマート農業や新技術に取り組む生産者が増えてきているが、そのための機械等の価格はまだまだ高価。若い後継者なども取り組みやすいよう支援が必要。
- ・パワーアップ事業は継続されているが、事業単価が右肩上がり、生産者負担が増加。しっかりと基盤整備を行い、生産者が安心して米作りができるように、北海道が先駆的な役割を果たしていただきたい。
- ・北海道農業は輪作をきちんと行うこと。これが一番の土づくりであり、安定生産を最大限維持できる仕組みであると、我々生産者は、常々考えている。

- 安定生産のためには、畑作の品目ごとに論じるのではなく、たまねぎ、にんじんなどの野菜も取り入れた輪作体系の確立を目指すべき。
- 規模拡大を進めるだけでなく農業者数を減らすことのないよう、家族経営の中で生産基盤を守りながら、フル活動して農業生産を拡大させていくことを畑作と野菜作の中に記載すべき。
- 高品質な野菜の生産をさらに拡大しながら、国際市場を狙った販売戦略を考えていくこと、年間を通して生産出荷し産地としての責任を果たすためにも、作付指標を設定せずとも、輪作体系をきちんと進めた生産者への何らかの措置を創設するなど、生産性の向上に結びつく体制構築を畑作の中では考えて行く必要があるのではないか。
- YES！clean農産物の認知度向上について、イベントでPRブースを設置しているとのことだが、回数を多くする、これまでとは違うイベントに参加するなど、消費者の記憶に残るPRをされてはいかがか。コープさっぽろは、毎年全道8カ所でイベント行い、3万人を超える参加者に来ていただいているので、ぜひ参加し、利用していただきたいと思う。
- 有機農業の推進は必要だと思っている。現在、コスト等が商品価格に上乗せになっているのであれば、その部分を一定の期間だけでも助成できないか。
- 6次産業化プランナーを知らない人が多い。
- 6次産業化に取り組む際、お金を借りる手順を教えてくれると、とても親切。
- 振興局で行う女性の集いなどで、6次化を手がけたい人を集めた支援セミナーの開催や、地元で6次化を教える人を紹介するなど、手近なことから始められるようにすると良い。
- 商品として販売できる許可をとったJAなどの加工施設で、1～2年の間、力をつけた上で、お金を借りて自分たち加工場を作る方法があれば良いと思う。6次化を行いたい若手は増えてくると思うので、このように発掘して育てるのが良い。
- 北海道の農作物などに求められるものは「おいしさ」。レストランではアスパラやとうきびの人気は高いが、旬の時期が短いため、提供できる時間が少ない。ブロッコリーの高鮮度流通技術を他の農産物に活用することや、新たな栽培法など、旬の時期を延ばすような技術開発をしていただきたい。
- 北海道は加工度の低い加工品を作ることが重要。例えば、朝もぎのとうきびのような加工品、じゃがバターであれば通年で提供できる加工品など、加工度の低い加工品を徹底して作っていくことで、道産農畜産物の加工品としての価値が上がるのではないか。
- 国内において、少子高齢化という形で食市場が縮小していく中で、いわゆる輸出を維持拡大成長していくことは、道内の食品製造業の振興においても有効な手段であるということは間違いない。
- 道産食品の国内外へ移出・輸出を進めていく中で、生産量自体の拡大が重要。計画的な食品製造の継続には、原材料である農水産物の安定調達が必要であり、農林水産業における生産基盤の整備や生産現場で起きている課題について、北海道が先頭に立って取り組んでリーダーシップを示していただきたい。
- 食の輸出拡大戦略の進捗についても、しっかり管理し、報告をして協議をするなど実効性のある取組としていただきたい。
- 女性指導農業士がなかなか増えていかないのが課題。女性のリーダー的な人材を増やすことは、一朝一夕に簡単にはできるものではないと思っており、指導農業士の認定要綱に新たに

認定基準が加えられたが、それによって指導農業士に推薦される人が多くなるということではない。今、女性の活躍推進と言われているが、数字を増やしたところで、それに応えてくれる女性がいるのかどうか問題。

- 農業政策を決めるときには男性ばかりではなく、むしろ計画段階から関わる女性農業者の数を増やすプロジェクトを練って欲しい。少ない女性指導農業士などが忙しい思いをしている現状にあるので、農業的にいうと、もうちょっと深く起こして欲しいと感じる。
- 近年の農業経営は、多様化、大規模化が進み、労働力不足や後継者不足により、家族経営による営農の存続が危ぶまれている状況。法人経営には、経営管理の高度化や雇用による労働力確保をはじめとした様々なメリットがあり多いと言われており、農家経営を維持発展させるには法人化が有効な手段。
- 今後、農業を成長産業とするためには、他産業並みの就業環境を整えるとともに、後継者となる担い手の確保が必要で、その手段として法人化を推進は必要な取り組み。
- 農家の規模、経営力などにより、1戸または複数戸による法人化など状況にあった取組が必要であり、タイプ別のメリットやデメリットなどを明らかにして、手続や財務・労務管理などのノウハウの提供など、経営のプロによる相談・指導体制の構築が必要。
- 人を使う、人を雇用するには、まずは人に選ばれるような企業や法人経営をしていかなければならず、きちんとした経営理念を、経営者として掲げていくことが必要。
- 他産業と同等レベルの雇用環境にあるところでない、人は集まってこない。このため、それぞれの個人経営者がスキルを向上させるため、北海道農業法人化等支援協議会において、税理士や社会保険労務士をチームで派遣し、サポートをする事業を実施しており、是非、活用してはどうか。
- それぞれの地域に法人があるが地方の経済、あるいは地方の人口減少の歯止めを担っている部分があると考えており、行政と一緒に雇用の環境を整えることや、地域の住みよい部分、町の特徴などを伝えて、求人活動を行うことで結果として効果を生むと感じており、各地域においても、環境整備をしながら歩調を合わせて、雇用就農の推進活動を展開するのが良い。
- 農業の現場だけでなく産業現場で労働力不足が進んでいる。今回整理された対応方向で、労働力不足に農家が対応するため、作業の外部委託が示されているが、いわゆる担い手や新規就農を確保することとは違って、一つ間違えると産業界全体での労働力の奪い合いとなる可能性がある。直接、農業従事だけではなく、生産を支援する形での労働市場全体についても、何らかの方向性を検討すべき。
- TMRセンターやコントラクターなどへの作業受委託は、地域の複数の経営体が契約し、作業手順で順番などが決まっていると思うが、その地域でどれだけ収穫物を適切に収穫するかという発想で農業生産量を最大化していくかということを考え出す必要。こうした取組ができるのは道庁だと思うので是非検討をお願い。
- 消費者協会に前からコンファが送られてきているが、何かの行事に他の会員の人も情報提供したいので多めに送付して欲しい。
- 25年から26年に道新に、食と農という連載が掲載されていたが、毎回切り取ってスクラップにしていた。その記事を読んで、改めて理解した点などがあったので、食べ物に関するものなど、そのような連載があっても良いと思っている。

- 土地改良による基盤整備によって大区画化、それから排水改良によって、用水の管理が楽になり、大区画化したことによって、他産業に就職していた息子が戻ってきたという事例を見ることができた。さらに基盤整備事業を進めて、食料の安定供給を担っている北海道の地位を崩さないようさないように、これからも進めていくべき。
- 農村ツーリズムは、大手の旅行会社などではたくさんの人を呼ぶこととして考えると、農家や農業の振興と別ではないかと捉えている。大規模でそして、安定して食料を供給できる北海道は、農村景観が非常に優れており、農村景観は農地があるからこそ。大規模な農地があることによって、人が来てるということ再確認して、北海道ならではのツーリズムとする方が良い。
- 北海道のツーリズムは、少しうわべという感じがするので、それを仕事にし、交流人口を増やしたいと思ってビジネスを考える人たちが、どれだけ農業者、農村に住む人たちの思いをくみ取り、その気持ちに寄り添えるか、ということが北海道の価値になるので、それを踏まえた施策を展開していただきたい。
- 北海道で移住先を探すことが大変。道のポータルサイトに紐付いている各市町村のワンストップ窓口のホームページを見ても、中身が見えず、一番欲しいと思っている生の情報が手に入りにくい。移住者の情報などを各市町村でデータ化して、それを道のポータルサイトで情報提供すると、似たようなケースで移住した人の情報がみえて、また、直接話を聞けたりすると、よりリアルな移住のシミュレーションができるのではないかと。
- 移住前は、役場と色々なやりとりがある、移住してしまうと、結構放っておかれる。移住者を甘やかすということではないが、地縁のない移住者は役場の担当者を頼るしかないなので、最初はやはり行政が移住者の人生に寄り添ったサポートが必要。
- 稲作の展開方向について、どのように需要を作るかをこれから真剣に考えなければならない。全国の農地面積の約25%を占める北海道の米の生産量は、全国の7%から8%位でしかないが、これから担い手が減り、大型化が必要となるため、スマート農業をなど色々取り組まなければならない中で、米というのは可能性があるのではないかと考える。
- 米の輸出は、白米で出すよりは玄米、玄米で出すよりは炊いて御飯にして、ご飯は加工してということを経営的にやる必要。米をベースとしたブランドを作っていく。一次産品だけではブランドにならないので、ブランド化にするには加工度を高めることが重要。
- 道は、北海道農業全体を底上げするため、メリハリをつけ、どこにどういった金を投入して、そしてそれをいかに育てていくかという戦略を立てて実施すべき。
- 北海道の農家経済は、結構良い状況が続いてきたと思うが、農家の人は、後継者の問題、従業員確保の問題、それから自由貿易協定が発効したときに、農産物の価格はどのように動いていくのかが懸念材料となり、必ずしも農業経営に対して前向きな姿勢で臨んでいるとは言えないところがあるのではなか。
- 今のところ、国民のあるいは消費者の眼差しは、日本の農業や北海道の農業にとって比較的好意的。これからどのように動いていくかは誰も予測できないが、不安要因を抱えながら、農業者は今後の動きを見ている状況ではないか。
- 今後、場合によっては悲観的な見通しが強くなって、全体の空気が悪くなるということもありうるだろうが、道の間点検などで、北海道の農業が悲観的な気分覆われて、後退しないかどうか、チェックをしていただきたい。
- 順調にいったるところそれから遅れているところ、それらを一つ一つチェックするという事

は、重要な作業であり、中間点検というのは、意味があることだと考える。

(5) その他

- ・参考資料により、平成31年度北海道農業・農村振興審議会開催計画（案）を説明

以上